［４］研究開発単位Ⅲ「SOZAN 国際塾」

（１）取組概要

SOZAN 国際塾の目的は，意欲ある生徒を対象に，幅広く深い教養，課題発見・解決能力，新たな価値を創造する力，主体的に行動する力，他者と協働する力，自他を尊重する力の６つの資質と能力を身につけ，グローバル社会で活躍できる生徒を育成することである。これらの能力を身につけ，課題研究を深めるために，なるべく多くのインプットとアウトプットの機会を与えようと年間を通し様々な活動を行った。校内ではそれぞれの課題研究に対しての指導を軸に据え，外国人教員によるグローバルスキルトレーニング，国際交流や，他校の生徒との交流の場を積極的に設けると同時に，多種多様な校外のイベントへの参加を促し，それらの機会を通じて国際塾生は大いに刺激を受けた。また，アウトプットの場として，校内外合わせ豊富な発表機会を準備し，それに合わせて生徒は課題研究を進め，そこから得たフィードバックを元に研究をさらに発展させることができた。

今年度の塾生は，１年生１３名，２年生２２名の計３５名であった。国際塾生は「持続可能な開発目標(SDGs)」をもとに研究領域・分野を決定し，各グループがその研究分野に関連した課題を設定して研究を行った。１年生は課題研究を進めていくための素地を築くことを第一に，必要な知識・技能を養うため，校内での様々な研修を受けたり，それぞれの興味・関心に応じて多種多様な校外でのイベントに参加したりした。それらを通じて学んだことをもとに，多角的な視点を持ち，信頼のおける情報源に自らあたりながら調査や分析を行い，２年生は昨年度の課題研究をさらに深めるため，外部機関等，各方面と連携を取り，協力を仰ぎながら調査に赴き研究内容をさらに発展させた。

SOZAN 国際塾　課題研究テーマ一覧

・全盲者の体内時計の乱れを修正する方法
・県別の LGBTQ＋への理解度からみる LGBTQ+の理解向上に向けての考察
・女性の社会進出と経済成長を促す制度～日本の経済成長のためには女性の登用は必須か～
・幸福度と SDGs の達成における関係　またそれに伴う SDGs のあり方について
・教師の負担軽減～部活動指導員の問題解決で労働時間を減らす～
・現代の町内会の現状と課題
・認知症患者の生活を支援する器具の考察と製作
・次世代に生態系をつなげる～レッサーパンダの保護～
・発達障害の子どもたちへの教育
・An Innovative Approach To Art Education
・オリジナル自助具の開発
・最も効率よく学習できるゲームは何か

（２）成果

各種イベント・発表会ごとに回答してもらったアンケートやレポートの結果を見ると，今年度の多くの塾生が，各種イベント・発表会等を通じて幅広く深い教養を身に付けることができたと回答している。また，校内外をはじめ，他者との協働を通して自他を尊重しながらも主体的に行動し，リーダーシップやフォロワーシップを養うことができたという報告も，複数の行事を通じて挙げられている。他者とかかわっていく中で，社会で問題になっている課題を見つけ，複数の情報をもとに解決策を導いていく力や社会的事象に対して新たな価値を創造する力を身に付けることができたと報告する塾生も多い。

今年度は昨年度に引き続き，新型コロナウイルスの影響でいくつかの行事がオンラインでの開催になったものの，少しずつ対面での発表会やイベントも再開されるようになり，他校の高校生や大学教授，企業人等，様々な分野で活躍している人々との直接的な交流の機会も増えた。まだまだ制限付きの行事も多い状況ではあるが，多くのセミナーや発表会，イベントに関する継続的な情報発信を行い，活動を絶やさないようにした成果が表れているのではないかと考える。グローバル合宿での貴重な体験を始め，多くの外部の講義への参加等が功を成したと考えられる。今年度は校内外において昨年度よりも多くの発表の機会を与えることができ，それに合わせて研究を進め，グループで発表の整合性を確認し，発表からのフィードバックを得て，内省し，研究を深めるという良いサイクルを作ることができたことも６つの資質能力の向上に貢献できた。社会的な問題について自分のこととして考える傾向も見受けられ，どの塾生も社会貢献の意識を身につけることができたと言えることも今年度の大きな成果といえる。

（３）課題

国際塾生に対して研究を行う際，安易に校内でのアンケート等に頼るのではなく，信憑性のあるデータを集め，根拠をしっかり示すことのできる研究を行うこと，データの出典を確認し，複数の情報から多角的な視点で情報分析を行うことを指導してきた。そのため，インターネットや文献からのデータを使う際，情報源を確認しながら複数の情報を突き合わせて研究に生かしていくことができている。今後の課題としては，文献調査にとどまらず，フィールドワークやインタビュー，実験等の外部機関と連携した研究をより積極的に行っていく必要がある。また，情報を分析する場面で，どの方法を用いて分析を進めれば良いのかが分からず，苦戦している様子が見られたり，せっかく収集した情報をうまく分析したりことができずに，自身の課題研究に十分に活かすことができていない場合もあった。今後は分析方法について指導する時間を拡充し，実践や演習等を通じて適切な分析方法を身につけさせていく必要があると考えられる。